

「長屋の花見」

広島県 石崎 勝子様

もう六十年以上も前の事なのに、桜の季節になるとよみがえる。『花見』の思い出。その頃、私は慶照寺と言う大きな寺の裏長屋に住んでいた。ズラリと並んだ長屋はどの家も同じ様な間取りで、後に団塊の世代と呼ばれる子供達がゴロゴロしていた。皆、豊かではないが、下町特有の活気があふれていた。生活はつつめけ。まるで江戸時代みたいにな。そう、うわさ話だけではない。

住民に悪意はなく、それどころか、善意のかたまりのおせっかいやきの集まりだった。困っている人に対して暖かさ、肩寄せ合い、助け合つての暮らしがあった。

私達の長屋、胡町九組では年に一度『花見』に行っていた。遠出ではなく、すぐ近くの羽中公園（現府中公園）だが、今考えると何と豊かな時間空間だったろうと思う。

当時、組費は月百円だった。その内からの出費の割りには、ござの上に並べられた手作りの花見弁当は、それはそれはおいしかった。女子供が大方だったので酒こそ少なかったが、おにぎりの白、ゴマ塩、卵焼きの黄、菜っ葉の緑、そしてピカーは『花ソーセージ』のピンク。練り物といえバカマボコや竹輪が主流だった時代に花ソーセージは、ただ切っただけなのに何と華やかでしゃれて輝いて見えた。目にも口にもごちそうで、子供心にも堪能したものだ。

そして、圧巻は、元芸者でその当時も頼まれればお座敷に出ていた井上のおばさんの三味線の弾き語り。美人というのではないがいかにも粋だった。着こなしや所作が垢抜けているのだ。

花見弁当を食べると男の子達はそれぞれ野っぱらを駆け回っていたが、大人達や、他所の花見客までもが、三味の音に聞きほれていた。注目の的の花見であつた。

同じ組に、玉ちゃんという聾啞の女性がいた。中年を過ぎていたらしいが、いつもニコニコ。働き者で、身ぶり手ぶりで通じ合っていた。私の顔も『アッアッ！』でわかつていた。いわゆる身傷者だが、長屋の住人として一人で立派に生活していた。後にも先にも差

別など感じた事は無い。それはキツパリと言える。

多種多様な人間の集まりだったが、絆というものが結ばれていた。

今年も又、美しく花が咲くだろう。あの時の長屋の花見はもはや無理な話。決して豪華ではなかった弁当だったとしても、思い出す。目に浮かぶ。心の賛歌というものを。見上げれば桜の花びら。弁当の主役は花ソーセージ。皆の笑顔もピンク色にはじけていた長屋の花見。なつかしい記憶。